

篠遠喜彦博士 追悼シンポジウム

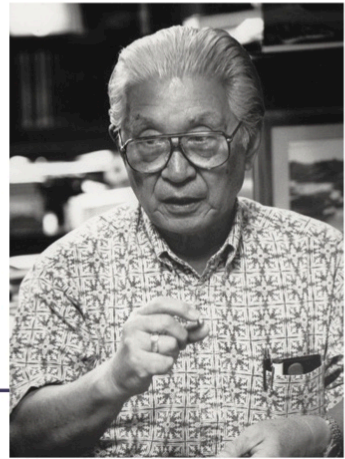
楽園考古学を越えて

南太平洋 —— 考古学の挑戦と冒険



地球の表面積の3分の1にもなる太平洋。視線を南に移すと、そこにあるのは楽園と呼ばれた島じまです。人類は、いかにして大海原を越え、いつごろ島じまに移り住み、楽園を築き上げていったのでしょうか？ この大いなる謎の解明に挑戦するのが考古学です。考古学は発掘調査だけではありません。わずかな手がかりから古代の船を再現し、実際に冒険航海に出ます。また、土中に埋もれた神殿を築き直し、遠い過去と現代の人のつなげようとしています。領域は広く、そこで活躍するのは学者だけではなく、楽園考古学の世界へ……。人類史の謎を解くのはあなたかもしれません。昨年、この分野のパイオニアであったひとりの日本人がハワイで他界しました。篠遠喜彦博士。私たちは、ここに最新の取り組みを発表し、篠遠博士に捧げます。冒険心あふれる後継者の登場を願って。

篠遠喜彦博士追悼事業実行委員会代表：後藤 明



2018年11月3日(土・祝)

10:00~17:00 (開場9:30)

会 場 東京海洋大学越中島会館講堂

定 員 400名

参加費 無料 *事前申込は不要です。当日は定員になり次第、ご入場を締め切らせていただきます。

主 催 篠遠喜彦博士追悼事業実行委員会

制作協力 株式会社ヨンロクニ

事務局 田村祐司(東京海洋大学) / 滝沢守生(株式会社ヨンロクニ) / 藍野裕之(ジャーナリスト)

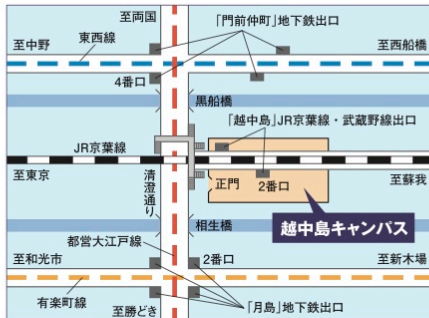
お問い合わせ 090-3249-7813 (藍野裕之) h.aino@icloud.com



【会場概要】 東京海洋大学 越中島会館 講堂
東京都江東区越中島 2-1-6

JR京葉線・武蔵野線「越中島」駅下車徒歩約2分、
地下鉄東西線・大江戸線「門前仲町」駅または「月島」駅下車徒歩約10分

車でのご来場はご遠慮ください。



越中島会館は、東京水産大学の前身である旧水産講習所の本館として1935年(昭和8)に竣工した日本の水産・商船教育界の記念碑的建物です。講堂は2階。現在、建物は国の有形文化財に登録されています。2007年夏に「ホクレア号日本航海記念シンポジウム」に篠遠博士が来日され、ご講演されました。

篠遠喜彦博士 追悼シンポジウム

楽園考古学を越えて

南太平洋——考古学の挑戦と冒険



プログラム

10:00 - 10:10 開会の辞
岩淵 聡文 (東京海洋大学教授)

プロローグ

10:10 - 10:40 映像作家・門田 修による特別編集映像
「篠遠先生が語る～ポリネシア発掘63年」上映

10:40 - 11:10 基調講演「楽園考古学の系譜—T.ハイエルダール、タオテ・シフト、そして私たち—」
後藤 明 (南山大学教授)

11:10 - 11:40 特別講演「1960年代末のハワイ—日本人によるオセアニア考古学の胎動—」
植木 武 (共立女子学園名誉教授)

11:40 - 12:40 *休憩・昼食懇親会 (東京海洋大学 マリンカフェ)

第1部 オセアニア考古学の領域 —発掘、復元、そして文化財保護—

12:45 - 13:15 「オセアニア考古学の半世紀—島々の発掘から海中の発掘へ—」
小野 林太郎 (東海大学准教授)

13:15 - 13:45 「ポリネシアの遺跡—考古学者と文化遺産—」
林 徹 (国際基督教大学講師)

13:45 - 14:00 「コメント」+ 聴衆との質疑応答
丸山 清志 (バスク文化財センター)

第2部 カヌールネサンス —実験考古学の果たす役割—

14:00 - 14:30 3万年前の航海—実験考古学の可能性—
海部 陽介 (国立科学博物館 人類史研究グループ長)

14:30 - 15:00 「ホクレア号とは何か—カヌールネサンスと太平洋の航海術—」
内田 正洋 (海洋ジャーナリスト)

15:00 - 15:15 「コメント」+ 聴衆との質疑応答
石村 智 (東京文化財研究所)

第3部 総合討論 オセアニア考古学の未来

15:30 - 16:50 司会/後藤 明
パネリスト/植木 武・林 徹・海部 陽介・内田 正洋・門田 修・小野 林太郎

16:50 - 17:00 閉会挨拶
秋道 智淵 (国立民族学博物館名誉教授・国立総合地球環境研究所名誉教授)

篠遠喜彦博士 1924～2017

Dr. Yoshiko.H.Sinoto

1924年9月3日、東京・保谷市に生まれる。

キリスト教教育の自由学園に入学。在学中に自由学園校地で縄文時代の遺跡が見つかったのを契機に考古学に引き込まれる。

1954年 カリフォルニア州立大学バークレー校で旧石器時代を研究しようとする。単身渡米の途についたが、米国の後見人の指示によりハワイで途中下船。ケネス・P・エモリー博士が率いたビショップ博物館の発掘調査が行われていたハワイ島南端のサウスポイントへ向かう。日本仕込みの発掘技術にアメリカ人たちは驚愕。

エモリー博士の強い勧めでハワイ大学に留学先を変更し、卒業はビショップ博物館に勤務。そして、土器が出土しないハワイ諸島で、釣りばりを資料にした文化編年が可能なのではないかと着想し、その方法論の研究を進めた。

1961年 北海道大学より理学博士の学位を授けられた後、ハワイに戻り、調査範囲をタヒチ、マルケサス諸島、トゥアモツ諸島など、東ポリネシア全域に拡大していった。そして、ポリネシアに、いつ、どのような経路で人類が移住したのかをエモリー博士と連名で提示。世界初の試みだった (現在、この学説は「オーソドックス・シナリオ」と呼ばれる)。また、1960年代よりタヒチにて重要な遺跡の復元活動を行ない始める。そのうちの中央ポリネシア最大の宗教遺跡マラエ・タブアプアテアは、仏領ポリネシアで初めて世界文化遺産登録された (2017年7月)。

1975年 翌年のアメリカ建国200年を前に、ハワイで企画された実験航海プロジェクトの学術顧問に就任。このとき復元された遠洋航海型双胴カヌー「ホクレア」号は、ミクロネシアのサタウル島人の助けを借りながら、ハワイ～タヒチの約3000kmの航海を、夜空の星で方位を知るなどの伝統的な航海術で成功させる。1978年にはタヒチのフアヒネ島で水没遺跡を発見。ポリネシアで初めて古代の遠洋航海型双胴カヌーの多くの部品を掘り出した。

日本において勲五等双光旭日章、吉川英治文化賞、大同生命地域文化賞を受けた。また、仏領ポリネシア政府よりタヒチ・ヌイ勲章を受けたほか、米国ハワイ州では晩年「リビング・レジェンド」として敬愛を受けた。

主な著作に荒俣宏氏との対談による「楽園考古学」(平凡社)がある。同書は「CURVE OF THE HOOK ~ AN ARCHAEOLOGIST IN POLYNESIA」(UNIVERSITY OF HAWAII PRESS)として英訳出版された。2017年(平成29)10月4日、ホノルルにて死去。享年93

